



里山 + Art Project

築150年の古民家棟にある里山厨房「早苗饗」。個室「紫檀」には作品「松」（金沢で作られた金箔に特殊印刷）。

「里山十帖」を舞台に始まった「里山アートプロジェクト」。このプロジェクトは、館内や敷地にアート作品を展示するだけではなく、アートが生まれる環境をつくるのが一番の目的。クリエイティビティの原動力となる空間を“地方”につくることによって、農業、人口、経済、環境保全など、地方にある様々な問題に対する解決の糸口が見えてくるかもしれません。今日はプロジェクト参加者のおひとり、川上シュンさんをお招きして「里山アート考」。

川上シュンと「アート」

岩 川上さんのアート作品というのは、絵画でもないし、版画でもない。じゃあなんなのかといえ「印刷物」になるんだけど、かといつていわゆる印刷物じゃない。そのあたりがおもしろいと思うんですけど。

川 作品について語るのには僕自身も難しくして（笑）。僕の場合はデザイナー、アートディレクターというベースがあつて、そのさきにアーティストっていうポジションがある感じなんです。だからデザインを突き詰めていくと、そのカテゴリにおさまりきらなくなつて、「アート」って呼ぶしかないかな、と。僕の作品はメッセージ性があまり強くなくて、自分の中にある美

の追究、というイメージなので「デザイン」と呼んでもいいんですけどね。最近、気づかされたんですけど、僕は日本の「花鳥風月」が好きなんだな、と。だから「里山十帖」のために作った作品も「松」「月」「花」。無意識のなかで、「風」とか「息吹」とか、目に見えないモノを視覚化しようとしているんだと思うんです。僕のアートにおいての作家性というのは、「無意識の吐き出し」かなって思います。

岩 川上さんの作品は、自分で描くことでは表現できない世界ですよ。印刷技術があつてこそ表現できる世界。そこがおもしろいと思うんですけど。

川 グラフィックデザイナーというベースがあるので、「印刷」技術にはプロフェッショナルと

感じがいいなあ、と。ふつうはわざと、古いものとか、日本っぽいものを置いたりするでしょ。でも「里山十帖」のロビーにはいきなりエッグチェアがある。普通は違和感を感じるんですけど、違和感がないんですよ。非常に現代的でおもしろいし、センスだなーって思いましたね。僕も作品づくりではそういうことがしたいな、と思ってるので。

岩 宿泊棟はどうでした？

川 落ち着いていて、古民家とまったく違うのがまた良かったです。気張らず、長期滞在したいなあ、と思いました。デザイナーもしつこくないし、窓を開けると、そこには自然しかなくて。ゆっくり音楽聞いたり、読書したり、次の作品は何を作るのかなと考えたり。そういうゆっくりした時間が過ごせる場所だなあって。設計はすべて岩佐さんなんですよね？

岩 はい。常に、やりすぎないように、と考えていました。古民家棟は昔からそのままだったかのように、客室棟も内装や造作家具を作り込みすぎないように。建築家は斬新さを出したい、とやりすぎる人が多いと思うんです。たとえば古民家の中にガラスの箱を作るとか、鉄骨の構造体を入れてみるとか。インテ

リノベーションって？

岩 最近の旅館リノベーションって、ちよつとだけやって、写真をきれいに撮って、ほかは全部そのまま、空間ちぐはぐっていうのが多いんですけど。リノベーションについて何か思うこと、ありませんか？

川 確かに中途半端な物が多すぎます。でも、いわゆるリノベーションって、今までのものをちよつときれいにして、やりなおしました、っていう感じですよ。

川上 シュン

アートディレクター・アーティスト

1977年、東京・深川生まれ。2001年、「artless」を設立。グラフィック、映像、ブランディングなど様々なデザイン分野で活躍するかわら、アーティストとしての活動も行う。NY ADC賞はじめ受賞歴多数。「里山アートプロジェクト」第一号として「里山十帖」で新作を発表。



岩佐 十良

クリエイティブディレクター・編集者

1967年、東京・池袋生まれ。武蔵野美術大学ではインテリアデザインを専攻。2004年、日本橋にあった自遊人編集部を新潟・南魚沼に移転。そのライフスタイルが目ざされ「情熱大陸」「ソロモン流」などに出演。震災後、廃業予定の温泉宿を譲り受け、全面改装した。

品にあてはめちゃうクセがあるんですけど、「うわっ、すごい借景だな！」って。「すごい作品がすでにここにある」って思いました。人工物が何もないじゃないですか。僕は生まれても育ちも東京なので、人工物が無い場所って見たことないですよ。だから、それだけですごい感動しました。その風景を切り取ったら、そのまま作品になるな、って思いました。

岩 2回目は古民家のレセプション棟は完成しましたよね？

川 はい。「早苗饗」（レストラン）はどこにもない空間だし、自分がやりたいモノに似てる、通じる、と感じました。古い物と今が違和感なくミックスしている。それがすごくいいな、と。その時、山菜鍋をいただいたんですけど、これがもう最高で。大人になって、食に対して関心がより湧いてきて。そうすると、食べ物によって、体に入ってくる感じが違うっていう感覚があるんですよ。「里山十帖」の食事は、その入り加減がスムーズっていうか、水を飲んでいるみたいなイメージ。たぶん、食材が本当にいいからですよ。それがなにより印象的でした。

岩 3回目はほぼ完成してました。印象はどうでした？
川 重厚な古民家にこびてない

して自信がある。その技術を最大限使ったのが僕の作品です。デジタル技術を使っているのも、世代的な特徴かもしれないから、僕は絵の具を使いこなせないから、デジタルと印刷の技術を駆使して、僕にしか出来ない作品を作っているわけです。
岩 僕は絵は上手じゃないから思うんですが、絵が得意なら絵で表現しようと思うじゃないですか。でもそうなる日本画や水墨画の世界。そこでの表現は限られていますよね？
川 たしかに。でも僕は日本画家に憧れがある。長谷川等伯とか、琳派や狩野派とか。ああいうものが描けたら最高だろうなあって。そういう憧れを持っているから、金箔に何かをやってみたりするんですよ。日本の美意識や技術が好きだし、日本の伝統様式で何かを、という欲求がある。世界に向けて、僕の世界観を表現したいんです。

里山十帖、どうですか？

岩 何回も「里山十帖」にお越しいただいていますが、川上さんの目にはどう映りましたか？
川 最初にお伺いした時は、まだ工事中で。お風呂もできてませんでしたね（笑）。最初の印象はとにかく景色がきれいだなあ、と。僕はなんでも自分の作



静寂と静かな輝きを。金箔に特殊印刷で表現された作品「Moon/月」。

よね。だから「里山十帖」はリノベーションというよりも、コラボレーションかな、と。もともとあった建築にコラボレーションして合体しような。そういう新たな建築を作っているような感覚がありますよね。

川 あれは建て替えたほうが安いですよ。だから、最初に「里山十帖」に行った時に言ったと思うんですよ。「これは、体験する雑誌ですね」って。

岩 覚えてますよ。川 インテリア特集であり、食の特集であり、「時間の使い方」特集であり、観光、家具、断熱……たくさん詰まっていますよね。もちろん僕の作品も「アート」特集で紹介されているひとつ。この空間全体でライフスタ

りやあ、無理ですよ(笑)。岩 1泊2食で3万円前後が中心価格帯になっちゃいました。川 あの食事が食べられるんだつたら3万円は安いと思うんですけど。しかも客室によつては1万円台ですよ。安すぎますよ。岩 そう言ってくれると、嬉し

ので、泊食分離にしたんですが、そのあたりはどうですか？川 僕は、ここに泊まるなら、絶対にあの食事を食べて欲しいんです。もちろんあの景色を見て、空間に滞在するだけでもいいんですけど、食事までがひとつのエンタテインメントっていうか。岩 ありがとうございます。厨房のスタッフが喜びます(笑)。

「里山十帖は“体感する雑誌”。雑誌を読むように体感すると面白い」

かったでしょうね(笑)。

岩 そ、そうですね……(爆笑)。

川 でもこれは、残すことに価値がありますよね。建て替えるよりも、付加価値もプラオリエイもはるかに高い。世界のどこにもないモノが出来ていると思うんです。ああいう考え方で建築をやる人がもつと増えたらいいですよね。岩佐さんは編集の人なので、もともとあったものを大事にするんですよね。もともとあるいいものをピックアップして、自分の作品にするような。僕もそういう部分があつて、昔からあるいいものを僕なりにピックアップして、変換して、自分の作品にする。雑誌もしか

イルの提案をしているわけですよね？だから雑誌を読むように、体感すると面白い。

滞在から生まれるもの

岩 川上さんが滞在したら、どんな作品が生まれそうですか。

川 朝、昼、夜で景色の空気感や色が違つて時点で、僕は完全にインスピレーションを受けてます。あとは窓からの景色のレイヤー感が興味深くて。手前の山、奥の山、すごい奥の山……

……つてあるじゃないですか。さらに雲が何層かあるんですよ。そのレイヤーの組み合わせが日によつて、時間によつてまた違うんですよ。あとは、食材に

は、クリエイターしかないと思うんですよ。「お金なんていらないよ」「壊しちゃえばいいじゃん」つて軽く言えるのはクリエイターの特権みたいなところ、あるじゃないですか。

川 どこかアバンギャルドで、反社会的じゃないと。新しいものは生まれなくてもいいんですよ。デザインとかアートぐらいいは、自由に表現して、生きていってもいいのかなあ、と思いますけどね。

岩 クリエイターつて、お金から入る人つてほとんどいないと思うんですよ。自分でこういうことを表現したいとか、訴えたいとか。純粹にこんなものを作りたいとか。そこから入ること

岩 ありがとうございます。厨房のスタッフが喜びます(笑)。

里山アート・レジデンス

川 ところで、玄関前に建っていた元日帰り入浴棟、あの跡地はどうするんですか？

岩 短期貸しの「里山アート・レジデンス」、つまり、クリエイ

ターズ・レジデンスみたいなものをつくりたかったんですよ。でも、もうお金も使い果たしちゃつたし、「夢」ですが。どこか企業が協賛してくれないでしょうか？建設費は4〜5000万円くらいだと思うんです。川 海外だと、アーティストをサポートすることが文化において大切なことだ、と感じている方が多いから、レジデンスやアーティストサポートプログラムが存在するんですが、日本は難しいですよね。

岩 そうなんですよね。でも、僕が最近思うのは、にっちもさつちもいかない、がちがちで動かない世の中を再構築できるの

は、クリエイターしかないと思うんですよ。「お金なんていらないよ」「壊しちゃえばいいじゃん」つて軽く言えるのはクリエイターの特権みたいなところ、あるじゃないですか。

川 どこかアバンギャルドで、反社会的じゃないと。新しいものは生まれなくてもいいんですよ。デザインとかアートぐらいいは、自由に表現して、生きていってもいいのかなあ、と思いますけどね。

岩 クリエイターつて、お金から入る人つてほとんどいないと思うんですよ。自分でこういうことを表現したいとか、訴えたいとか。純粹にこんなものを作りたいとか。そこから入ること

が今の世の中にはとつても重要だと思つています。川 社会に与える影響、という点で言うと、僕はアートよりデザインのほうが強いと思つています。より社会に近く、広く多数の人に届けるものですよ。一方で、アートは人の心に大きな影響を与える力があつて、デザインよりも、人を感動させる力があるんじゃないかな、つて思うんです。もう少し個人に向けて影響を与えるような、人生を変えちゃうような……。もちろんそれによつて、社会も変わっていくかもしれないんですけど。だから「アートは人生を変え、デザインは社会を変える」つてことなんじゃないかな、と。

岩 そうやって考えていくと、やっぱり、「里山アート・レジデンス」、つくりたいなあ。川 こんな場所にクリエイターズ・レジデンスがあつたらいいですよ。でも、僕はそんなプログラムがなくても行くんですけどね(笑)。

岩 もうすぐ山菜の季節。また遊びに来てくださいね。今日はありがとうございました。



メゾネットタイプの「Room 202」のリビングに銀箔に特殊印刷で表現された作品「Flower/花」。

岩 そうやって考えていくと、やっぱり、「里山アート・レジデンス」、つくりたいなあ。川 こんな場所にクリエイターズ・レジデンスがあつたらいいですよ。でも、僕はそんなプログラムがなくても行くんですけどね(笑)。

岩 もうすぐ山菜の季節。また遊びに来てくださいね。今日はありがとうございました。

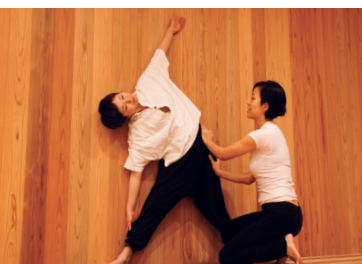
岩 もうすぐ山菜の季節。また遊びに来てくださいね。今日はありがとうございました。



多種多様な山菜を、生で、半生で、茹でて、素材の持ち味を活かしながら「しゃぶしゃぶ」でお楽しみください。山菜のベストシーズンはGW明けから6月初旬までの、ほんのわずかな期間です！ 1泊2食22,800円〜(税別・5/6~6/15限定)



自遊人ファーム自社農園で昔ながらの“手植え”体験を。当日は岩佐が指導します。別日程で企業研修アレンジメントも可能。6月8日開催・1泊2食24,525円〜(税別) ※電話予約のみ受付。システムの都合上、webでは満室になっています。



1~2名の個人グループで、ヨガインストラクターとのプライベートレッスン。姿勢のカウンセリングから始まり、体のクセや悩みを丁寧に矯正します。体だけでなく心もすっきり。 1泊2食31,800円〜(税別・5日前までに要予約)



5月28日~6月末の約1カ月間、「里山十帖」を、川上シュンがアートジャック！ 新作も多数登場予定です。開催期間中、「里山アートを考える会」など、アートなプログラムも企画中。詳細はfacebookやwebで。アートは体感してこそ楽しいもの、ですよ！

ピュア&デトックス「里山の山菜鍋」
春の恵みで身体のクレンジング

魚沼産コシヒカリの「田植え体験」
土に触れ、食について考える

完全プライベート「ヨガセラピー」
自分の体のクセを知り、代謝アップ

川上シュン×里山十帖
アートジャック。されちゃいます